

第45回 辰巳峠～マッコウ～八本越

平成27年3月22日（日）晴

行程

辰巳峠 7:42 - 辰巳 8:22 - 宮ヶ谷 9:46 - 南平 11:46 昼食 -

マッコウ 13:02 - 八本越 13:34 - 余戸 16:02

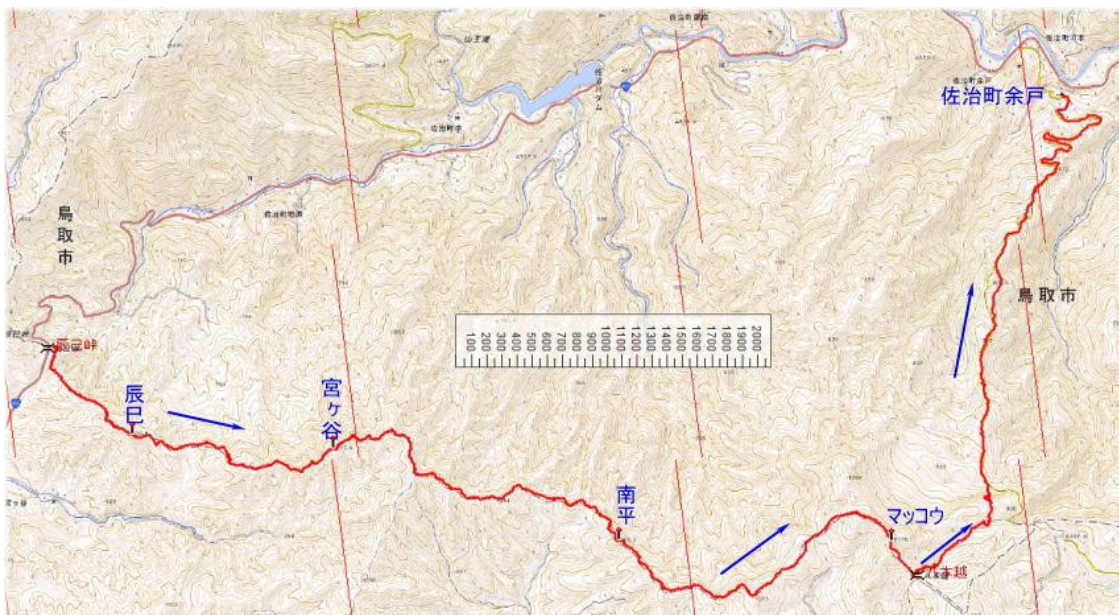
隊員 舩越 仁 角原 覚 角原 鶴子 岡本 紀美子 佐々木 靖昌 佐伯 学 高田 一馬
岡田 至弘 岡田 仁子 井上 美津子



4、5月並の気温と連日の降雨で、雪が無くなりほしないか心配しました。でも根曲り竹の殆どは雪の下、雪面も締まっていて快適なフィナーレ歩きを楽しめました。振り返れば古希を越えた3年前の冬、雪山好きの仲間を集め、ゆきんこ隊と称し同い年の角原覚氏と小生がリーダーとなって、2012年12月に広島鳥取岡山県境の三国山から歩き始めました。あっけない年月の流れ

ですが、足かけ4年の3冬が終わりました。

何しろ登山道のないルートなので、どこに何があるのかは全く分かりません。厳しいナイフリッジや雪庇、行く手を阻む岩もありました。それ以上の難関は稜線との距離とそこへの到達、離脱のルートでした。又、県発表でツキノワグマが200頭も生息するという地域なので、鈴、音楽、笛は欠かせませんでした。現に最終日にはクマの足跡と糞に遭遇しました。そして、発見したこともあります。県境と中央分水嶺が大きく異なっている2ヶ所がありました。二子山区域とカツラ谷です。終えるにあたり、全隊員（21名）とフィナーレを盛り上げてくれた10名に感謝申し上げます。



(第3種郵便物認可)

岡山

赤丘

豊

豊

年(平成27年)3月22日(日曜日)

平均70歳初の冬季踏破へ

岡山・鳥取県境を走る中央分水嶺(約160キロ)で、平均年齢70歳の県内の登山愛好家グループが初の冬季踏破に挑んでいる。1000以上の山々が揃く稜線を覆う白い雪を踏みしめ続けること3年。22日早朝、岡山最深部の難所・辰巳峠(鏡野町)を含む最後のルートに臨み、計画を達成する。(三島浩樹)

県境中央分水嶺160キロ

中央分水嶺は、太平洋側と日本海側の水系を分ける境界。北海道の宗谷岬から鹿児島県の佐多岬までの約5000キロで、「日本の背骨」とも呼ばれている。

日本山岳会が創立100周年の2004年、全ルートの踏査を実施。岡山・鳥取県境は同会山陰支部が担当した。積雪期を避けていると気づいた岡山市北区田益へ船越(としか)さんが「冬季なら初の踏破になる」と12年、挑戦を決意した。

入会資格60歳以上の「みづがしわ山の会」のメンバーに呼びかけ、船越さんを隊長に、倉敷市大城台

3年かけ きょう最後のルート

角原寛さん(73)を副隊長に「ゆきん隊」を結成。同年12月、160キロの最初の一步を最も西に位置する新見市神郷高瀬の峠に刻んだ。

春が近づけば凍と遭遇する危険が高まることから、ほぼ3月末までいったん休止。メンバーの年齢や経緯などを踏まえ、宿泊は避け、日中に行ける所で下山する。そのため、1回の行程は数キロでも踏破ルートに到着するまで20分以上歩いたことや、除雪されていた道を抜けることもあったという。

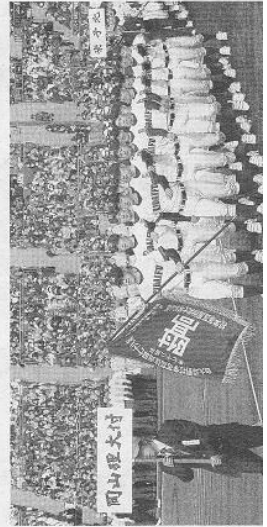
1回あたり平均6人のメンバーで挑み、昨年3月までに30回で計約100キロを歩き終えた。昨年12月から3年目のシーズンは辰巳峠・八木越など難所が続く。「今シーズンが一番きつい」と船越さん。「稜線をつないでいく作業は楽しい。山にロマンを感じているからやれる」と笑う。

これまでの参加者は総勢19人。45回目の22日は新人2人を含む10人が参加。岡山市を出発して辰巳峠に向かい、残り7・6キロを進む予定だ。角原さんは「来シーズンはないという覚悟で行く」と意気込み、船越さんは最後のひのき舞台みんなで無事に踏破し、感動のフィナーレを迎えた」と話す。



冬季踏破達成を目指し、雪に覆われた尾根を進むメンバー(2014年3月撮影、船越さん提供)

胸張りはつらつ行進 理大付ナイン



選抜 高校野球

甲子園球場で21日に開幕した選抜高校野球大会の開会式で、17年ぶりに度目の

出場を果たしナインは、大を張り、大入り場行進。甲つかりと磨み開会式を終将は「観客が

初代「石灯籠」忠実に再現

岡山後楽園 江戸期絵図な

岡山後楽園(岡山市北区)の延壽亭前の孝生にある茶庭型石灯籠が新調査され、21日、入れ替え作業が行われた。後世の修復で時代の異なるパーツが組み合わされていたのを、江戸時代の絵図や戦前の写真を基に、初代の姿をほぼ忠実に再現したという。

灯籠は高さ1・14メートル、幅0・91メートル。台座の上はリング状の火袋が乗り、笠石が取り付けられている。製作年代は不明で、1712年の絵図には姿の似た石灯籠が描かれている。火袋は昭和30年代に破損したため、豊島(香川県土庄町産)の石で再生。一方、笠石は劣化が激しく、最上貝の宝珠な

ども失われて新しい火袋と象を与えたりや1933年



とからイベントを

巻頭インタビュー 人と山

船越 仁さん

積雪期の岡山・鳥取県境160kmを45回目で踏破完了。



大山にて。角原覚副隊長（左）と船越仁隊長（右）。2015年3月31日撮影



大谷山で、はしゃぐゆきんご隊。2014年2月23日撮影

週刊ヤマケイに毎週のようにご寄稿をいただける岡山市の船越仁さん。3月26日の通巻132号には、こんな見出しでのご寄稿をいただきました。平均年齢70歳の方々による冬季の継続縦走。リーダーとして牽引された船越さんに聞きました。

(聞き手=久保田賢次/『週刊ヤマケイ』編集長)

久保田：達成おめでとうございます。2012年12月に広島鳥取岡山県境の三国山から歩き始められたということですが、足かけ4年。とても長い期間でしたね。

船越：振り返るとよく続いたものと思います。当初は、ひと冬にどれだけとか、目標は課せずに、気楽に楽しむつもりだったのです。それが3年目には、加齢に追いかけてられていることに気づき、わが身に鞭を打ちました。何もせずに過ごしては、あっという間に年月の過ぎ去る高齢者にとりましては、久しぶりにアクセントの付いた年月になったと思っています。73歳にしては上出来です。

久保田：そもそも船越さんが、この継続縦走を思い立ったきっかけは、どんなことからでしたのでしょうか。参加メンバーの方々はどのように選ばれたのですか。

船越：大山や蒜山の他、県北の手頃な雪山を手当たり次第に遊んでいたのですが、次の山をどこにするのが面倒になって来ましてね。継続縦走なら、その手間が省けます。計画は経験豊富な同い年の角原副隊長が主で、私は音頭取りでした。

日本山岳会は、100周年記念事業として中央分水嶺踏査を各支部総掛かりでやられました。岡山鳥取県境に限るとはいえ冬季の全踏破の記録はなく、この160kmに高齢者のロマンを求めることにしました。

全体的には1000m級の雪稜なので、メンバーには全く条件は付けませんでした。最初は私達の所属会（みつがしわ山の会）の中で募りましたが、元々そんな枠はなく、雪との格闘を好む人なら誰でも参加してもらいました。一度でも参加すれば隊員とし、総員は21名に上りました。最終回のフィナーレ山行では通期最高の10名の盛会になりました。

久保田：160kmの県境の道のりには難所もあったでしょうし、大変なことも多かったのではないのでしょうか。船越さんの次の目標についても教えてください。

船越：何しろ登山道のないルートなので、どこに何があるのかは全く分かりません。厳しいナイフリッジや雪庇、行く手を阻む岩もありました。それ以上の難関は稜線までのアプローチと距離、離脱のルート尾根の判別でした。

また、県発表でツキノワグマが200頭も生息するという山域なので、鈴、音楽、笛は欠かせませんでした。現に3月の最終回には足跡と糞に遭遇しました。結局、45回全踏破は副隊長の角原氏と私だけになりました。原則2点駐車なので、ふたりの都合が優先した結果です。

具体的な目標は未だありませんが、80歳までは山に登り続けたい。それも何かに対して常に挑み続けたい。挑戦とまでは行かなくていい、挑む気持ちを忘れないことが大切と思っています。

船越 仁 (ふなこし・ひとし)

鳥取県米子市出身、岡山市在住、73歳、博士(学術)。林原生物化学研究所で定年退職後、本格的に山にのめり込む。みつがしわ山の会を軸足に、創立時のアルパインクライマーズクラブ岡山で、雪、岩、沢を経験。2年連続は念願の北アルプス主稜線、焼岳～白馬岳の継続縦走を終える。前岡山県山岳連盟事務局長、みつがしわ山の会会長。